俳聖の心
風土に生きる

松尾芭蕉を敬慕するといったことから全国各地に建てられた芭蕉句碑は、市内に15基点在し、選句の内容がその地に合致し今に息づいています。江戸時代前期に全国を旅した芭蕉が群馬を訪れた記録はありませんが、当時、沼田で俳句が盛んだったことがうかがえます。

武具塚の前で一句。赤とんぼが飛び始め、秋の情景を思い巡らせる（右から貝瀬さん、白井さん、真下さん）

村上鬼城など　俳句でにぎわい

楽しいことやうれしいこと、人生で直面するつらく悲しい出来事もすべてが題材で、17文字で伝えられるのが俳句の醍醐味です。

利根沼田は江戸時代から俳句が盛んで、写生や写実を基にした詩風は今も残っています。群馬を代表する俳人村上鬼城は、県内各地の結社に影響を与え、金子刀水など沼田の門下生も、後に世間に名が知られ多くの功績を残しています。

丁寧な暮らし　俳句で心豊かに

俳句は、紙とペンがあれば思い立ったときに一人でもできる手軽さがあり、題材は日常にあふれています。例えば、すれ違う人たちの服装の変化や前日の夕飯の内容を振り返ったりと、日々の小さな出来事に意識を向けるだけで、いつもと少し違う世界が生まれます。俳句を詠む習慣ができてくると、言葉の意味や語源などを調べたり、人の句をたくさん詠んで語彙や表現を増やしたりと、言葉の一つ一つに向き合う時間が増えます。併せて、エッセンスを一つも削らず、余計な情報も一切入れずに練り上げる訓練や技巧を磨くことも求められます。俳句を始めると20年、30年と長く続ける人が多いといわれるのは、小さな物事に丁寧に向き合う積み重ねによって、人生が豊かになると感じられることが理由の一つでもあるようです。

今世につながる芭蕉の句

松尾芭蕉の句は分かりやすく、言葉の広がりや深さから、静寂の中の自然美や人生観が心に響くといわれています。『おくのほそ道』で、石川県小松市の多太神社を訪れた芭蕉が、斎藤実盛のかぶとを見て偲び吟じた有名な句があります。

むざんやな
甲の下の　蟋蟀

（句の背景／源為義・義朝父子に仕えた斉藤実盛は、幼い木曽義仲の命を救ったが、年を経て平家方として義仲と戦い討たれる。恩人実盛の首に涙した義仲は、多太神社に実盛のかぶとを奉納した）

俳句の道を歩み50年になろうとする貝瀬久代さんは、地域の俳句教室で講師を努め、俳句の魅力を広めています。芭蕉が義仲を偲ぶ心と、かぶとの下でコオロギも悲しみを思い鳴いている情景を表す中に、貝瀬さんは「いつの時代にも戦争はあり、この句が今世につながっているよう」と、想像を膨らませます。

芭蕉の神格化した神名が「花之本桃青大神」で、「桃青」は俳号である。この神に祀った石碑は戸神山の中腹にある虚空蔵堂境内にある

貝瀬さんは沼田市内の町田観音堂内に、同じ句が刻まれた句碑があることを知り、その場所を訪れる史跡巡りに参加。「沼田氏最後の主将平八郎景義が真田昌幸に謀殺されたとき、甲冑を埋めたと伝えられた塚の上に芭蕉の悲劇の句をしたためた」と、ガイドから説明を受けました。詠まれたのは1689年頃で、句碑が建てられたのは1823年と約150年後。情報が届きづらい時代に、なぜ内容が合致した句が建てられたのだろうと感じながら、芭蕉の句がこの場所につながっていることに思いを寄せました。

それぞれの心模様を表現

心地よい秋風を感じられる9月下旬。貝瀬さんと俳句会「桔梗」に所属するメンバーが、武具塚の前で句を詠みました。〈秋麗や武具塚に観る芭蕉の句／貝瀬久代〉〈武具塚の円し色なき風の中／真下章子〉〈芭蕉句碑のうするる文字や赤とんぼ／白井幸四郎〉

同じ風景を見て同じ史実を知っても、感じ方や表現は十人十色で、さまざま情景が広がります。俳句は一人でできる手軽さがある一方、人数が集まれば世界が広がり、自分の思いも共感してもらえ心の交感ができます。貝瀬さんは「芭蕉のように情景を正確に伝える表現の力を磨き続け、地域と人をつなぐ俳句の魅力を発信していきます」と、話します。

春の夜は
華王に明てしまいけり

栄町十二山神社境内。中央に草書体で大きく「芭蕉翁」と刻まれる。「華王」はサクラの意。昔、この地にサクラの大木があり名所だった

好々爺の顔容で宗匠帽をかぶり、旅のつれづれに句を詠む姿の芭蕉像（個人所蔵）

八九間
空で雨ふる柳かな

平等寺の芭蕉句碑。三角形で左側に銘文、右側に翁とあり、1893（明治26）年に芭蕉没後200年忌追慕として建てられた。県内三碑に入る名碑